

会 師 医 市 牧 小 苦
師 医
士 高 寄 友

四肢の骨折

ヒト下の骨格は約二百個の骨とその間を連結する関節とからなっております。文字通り骨が折れることを骨折というわけですが、その多くは手足、いわゆる四肢の骨折がほとんどです。

骨折の治療法は年齢により大きく異なり、若年者ほどギプス固定などの保存療法が有利となります。しかし、高齢者の場合ではギプス固定が長期間に及ぶ

若年者は保存療法が有利

場合、筋力の低下、隣接する関節の拘縮などから骨折部位によっては手術療法が有利となる場合もあります。

その理由のひとつとして、ギプス固定は原則として、骨折部位に隣接する二カ所の関節を固定する必要がありますからです。ただし、例外もあり、その代表が冬期間に多く、転倒した際に地面に手を着くことよって生じ

るコーレス骨折とよばれる手首の骨折では、通常、肘(ひじ)関節は固定しません。ギプスもこの数年の間に徐々に従来の石膏(せっこう)ギプスは姿を消し、代わって化学繊維を主体とした軽くて、湿気にも強いプラスチックギプスがみられるようになってきました。

手術療法は少なくとも身体にメスが入ることから、患者さん

によつてはためらいが見られる場合もありますが、その利点として術後早期からの運動が可能であるため前述の筋力低下や関節拘縮の心配がなくなります。

確実に手術が必要となるのは次の場合です。主要な動脈に近い部位では骨折端によるそれらへの直接損傷、あるいは骨折部から出来た血腫による圧迫で血行障害が生じ、手術の時期を逸

すると最悪の場合、切断となる場合もあります。また、主要な神経に近い部位でも重篤な神経障害が残存する場合があります。

このほか、骨折部が皮膚損傷により受傷時、瞬時でも外界と接した場合を開放骨折といい、受傷後六―八時間以内に創洗浄を行わないと化膿性骨髄炎となり、その治療期間が数年に及ぶ場合もあります。従つて、骨折部位と皮膚損傷部位が一致している場合にはこの開放骨折を念頭に入れなくてはなりません。また、関節の中の骨折もなるべく早期に手術を行い、骨折片を元の場所に戻しておかないとあとでその関節の動きが制限され、日常生活にも著しく支障をきたす場合がありますので気をつけなくてははいけません。